様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００６６７

研究課題名（和文）ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンシャリティの対照研究

研究課題名（英文）Contrastive Studies on the Tense, Aspect, Modality and Evidentiality in Romance Languages

研究代表者
山村　ひろみ（Yamamura, Hiromi）

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：９０２８１１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,360,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はロマンス諸語の動詞体系を特にモダリティとエビデンシャリティの観点から再分析するために、仏西伊伯葡羅英語の未来・前未来・条件法現在・条件法過去の諸用法に焦点を当て、それらの諸の「対照表」を作成した。この「対照表」を基に検討した結果、対象とする6つのロマンス諸語の未来・前未来は「事態を発話時以降に定位する」という時間的機能を共有するのに対し、条件法現在・条件法過去は、6つのロマンス諸語すべてに共通の機能を特定するのは難しかった。しかし、それらの条件法現在のモーダル用法は現在の事態に言及し、条件法過去のモーダル用法は過去の事態に言及するという特徴を共有するということは確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は従来テンス・アスペクトの観点から分析されることが一般的だったロマンス諸語の動詞体系をモダリティ、エビデンシャリティの観点から分析してみることを目指した。まず対象とする7つのロマンス諸語（仏西伊伯葡羅語）と英語の未来・前未来・条件法現在・条件法過去に焦点をあて、当該言語の当該形式の諸用法を他の言語のそれらと比較した「対照表」を作成した。次に、その「対照表」を基にロマンス諸語に見られる未来・前未来・条件法現在・条件法過去の機能の類似点と相違点をまとめた。このように6つのロマンス諸語の当該形式の機能をモダリティ、エビデンシャリティ一の観点から明らかにした研究は国内外にもない点は特筆に値する。

研究成果の概要（英文）：We made a comparative table of each of the future, the future perfect, the conditional present and the conditional past to analyse the verbal systems of the Romance languages from the point of "Modality" and"Evidentiality", focusing on the usages of above-mentioned four verbal forms of French, Spanish, Italian, Brazilian Portuguese, Portuguese Portuguese, Romanian and English. Based on the scrutiny study on the comparative tables, we verified that the future and the future perfect of the six Romance languages in question share the temporal function which localizes a situation in a time posterior to the speech time, whereas it was very difficult to specify some functions that are commun to the conditional present and the conditional past of the said languges. However, we found that the conditional present forms of the languages share a characteristics that their modal usages refer to the present situation and their conditional past forms refer to the past situation.

研究分野：言語学、スペイン語学

キーワード：ロマンス諸語　テンス　アスペクト　モダリティ　エビデンシャリティ　対照言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、それに先立つ基盤研究（C）「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」(課題番号 15K02482)の発展的展開であるが、そこでは Agatha Christie の The Thirteen Problems を基に英語とフランス語、スペイン語、イタリア語、ブラジルポルトガル語、ポルトガルポルトガル語、ルーマニア語のパラレルコーパスが作成され、特に、6 つのロマンス諸語の「大過去」の振る舞いを基に、それらの動詞体系の類似点と相違点が考察された。その結果、ロマンス諸語の動詞体系の十全な解明には、テンス・アスペクトの観点からの分析だけでは不十分で、モダリティ・エビデンシャリティといった観点からの考察も必要であることが明らかになった。そこで本研究は、ロマンス諸語の動詞体系をテンス・アスペクトに加え、モダリティ・エビデンシャリティという観点から再分析することにした。

２．研究の目的

上述のモダリティとは、発話の命題内容に対する話し手の態度を表す言語カテゴリーで、ロマンス諸語においては「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」といった時制形式に関係すると言われる (Squartini 2001,2008)。一方、近年のロマンス語学では、このモダリティがエビデンシャリティと共に論じられることが多い。エビデンシャリティとは、発話内容の情報源が直接的か間接的か、間接的な場合、それは話し手の推論によるものか、伝聞によるものかといったことを表示する言語カテゴリーを指す (Willett 1988, Frawley 1992)が、ロマンス諸語ではこのエビデンシャリティもその「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」に関与すると主張されている。そこで本研究は、フランス語、スペイン語、イタリア語、ブラジルポルトガル語、ポルトガルポルトガル語、ルーマニア語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」に焦点をあて、ロマンス諸語の動詞体系をテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンシャリティの観点から再分析し、それらの間に見られる類似点と相違点を明らかにすることをその目的とした。

３．研究の方法

上述の目的を達成するために、本研究は、まず、①ロマンス諸語および英語の当該形式の用法を規範文法において確認し、②当該言語の当該形式の諸用法を他の言語の当該形式の諸用法と比較対照し、③対象とする 7 言語（フランス語、スペイン語、イタリア語、ブラジルポルトガル語、ポルトガルポルトガル語、ルーマニア語、英語）における「未来・前未来・条件法現在・条件法過去の諸用法の対照表」を作成、④「対照表」を基に、ロマンス諸語に見られる「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の諸用法と機能の類似点と相違点を整理した。そして、ロマンス諸語における動詞体系をテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンシャリティの観点から対照的に考察した。

４．研究成果

(1) 統一テーマ：ロマンス諸語と英語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」について

本研究は、まず、研究課題の統一テーマを「ロマンス諸語と英語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の分析に定めた。その理由は、最近の研究によれば（Dendale (2001, 2010); Escandell-Vidal (2010); Squartini (2001, 2004, 2012)）、ロマンス諸語においては、とりわけ、これらの時制形式がそのモダリティ、エビデンシャリティに関わると指摘されているからである。また、本研究に英語を加えたのは、ロマンス諸語間に見られる当該時制形式の振る舞いを系統の異なる言語である英語のそれと比較対照することにより、モダリティ、エビデンシャリティにおけるその特徴をより明確に示すことができると考えたからである。この課題に取り組むために本研究が実施したことは次のとおりである。

まず、各語における「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」のパラダイムを示した。次に、各語の規範文法書における「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の記述を示した。その後、ロマンス諸語と英語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」を、対象となる 7 言語のうちのどれかの当該形式に確認された用法が他の言語にも同様に確認されるかを示した「対照表」を作成した。そして、最後にこの「対照表」に基づき、対象とした 6 つのロマンス諸語（フランス語、スペイン語、イタリア語、ブラジル・ポルトガルポルトガル語、ルーマニア語）の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の機能の類似点と相違点を実証的に示した。

(2)「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の諸用法の対照表

本研究が作成した「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の諸用法を対象とする 7 言語において比較した対照表を以下に示す。

表 1 :「未来」の諸用法の有無　(当該用法が存在する場合は✓の印がある)

言語 / 用法	仏	西	伊	伯	葡	羅	英
①発話時以降に生起する事態	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
②発話時における発話者の意思	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
③命令的な意味	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
④脅迫	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
⑤回想的未来	✓		✓	✓	✓		✓
⑥現在形の語調緩和	✓	✓	✓	✓	✓	✓	
⑦驚き・憤慨・反語		✓		✓	✓		
⑧現在の推量	✓	✓	✓	✓	✓		✓
⑨現在の譲歩		✓	✓			✓	
(i)条件節に出現する			✓			✓	✓
(ii) even if に出現する	✓		✓			✓	
(iii) when 節に出現する	✓		✓			✓	
(iv) parataxis 節に出現する	✓					✓	
迂言形式がある	✓	✓		✓	✓		✓

表 2 :「前未来」の諸用法の有無　(当該用法が存在する場合は✓の印がある)

言語 / 用法	仏	西	伊	伯	葡	羅	英
①発話時より後の時点よりも前に起こった未来の事態	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
②発話時より前の事態についての推量	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
③発話時より前の事態についての総括	✓		✓				
(i) 条件節で出現する			✓			✓	
(ii) when 節で出現する	✓		✓			✓	

表 3 :「条件法現在」の諸用法の有無　(当該用法が存在する場合は✓の印がある)

言語 / 用法	仏	西	伊	伯	葡	羅	英
①過去から見た未来の事態	✓	✓		✓	✓		✓
②文学的な語りの中で、これから必然的に起こる未来の事態	✓	✓		✓	✓		✓
③反事実用法	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
④驚き・憤慨・反語用法	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
⑤語調緩和・婉曲の表示	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
⑥遊戯の配役・夢想の表示	✓			✓	✓	✓	
⑦過去の事態の推量の表示		✓		✓	✓		

⑧過去の譲歩の表示		✓					
⑨文の真実性についての責任回避（伝聞）の表示	✓	✓	✓	✓	✓	✓	
(i)条件節に出現する			✓			✓	✓
(ii) when 節に出現する	✓		✓			✓	
(iii) parataxis 節に出現する	✓					✓	
(a)条件願望文						✓	
(b)比較(比喩的)						✓	
(c)罵詈雑言						✓	

表 4 :「条件法過去」の諸用法の有無　(当該用法が存在する場合は✓の印がある)

言語 / 用法	仏	西	伊	伯	葡	羅	英
①過去のある時点より後の時点より前に起こる事態	✓	✓		✓	✓	✓	
②反事実用法	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
③語調緩和・婉曲・遺憾	✓	✓	✓		✓	✓	
④驚き・憤慨・反語用法	✓		✓		✓	✓	
⑤過去の事態の推量の表示	✓	✓		✓	✓	✓	
⑥文の真実性についての責任回避（伝聞）の表示	✓	✓	✓	✓	✓	✓	
⑦過去から見た未来の事態			✓				
⑧文学的な語りの中でこれから必然的に起こる事態			✓				
(i)条件節に出現する			✓			✓	
(ii) when 節に出現する	✓		✓			✓	

(3) ロマンス諸語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の「対照表」から見た各形式の機能

上の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の「対照表」から分かる各形式の機能について述べる。まず、対象とするロマンス諸語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」は大きく「未来・前未来」と「条件法現在・条件法過去」に分けることができる。この分類は単に語形成のあり方に従ったものではなく、先に見た各形式の諸用法に基づく各形式の機能的違いに拠るものでもある。

「未来」については、対象とする 6 つのロマンス諸語および英語のすべての言語において「発話時以降に生起する事態を表示する」ということが確認された。また、同様に、すべての言語において、この発話時以降に生起する事態の主語の人称、また、その事態の内容などに従って、「発話者の発話時における意思」「命令的な意味」「脅迫的な意味」が表されることも確認された。これは、本研究が対象とする 7 言語においては、「未来」が「事態を発話時以降に定位する」という時間的機能を有していることを示すものである。一方、「未来」が発話時と同時関係にある事態に言及するそのモーダル用法については、「語調緩和」については、英語以外のロマンス諸語の「未来」には共通に確認されたが、「現在の推量」についてはロマンス諸語においても確認される言語とそうでない言語があり、「現在の譲歩」についてはスペイン語、イタリア語、ルーマニア語に見られるだけだった。このことから、ロマンス諸語の「未来」をモーダルの観点から統一的にまとめることは難しいと言える。一方、「前未来」の機能については、対象 7 言語すべてが示す「発話時より後の時点よりも前に起こった未来の事態の表示」「発話時より前の事態についての推量の表示」は、「未来」の「発話時以降に生起する事態の表示」「現在の推量の表示」に並行したものと考えることができる。

次に、「条件法現在・条件法過去」については、「未来・前未来」に見られたような6つのロマンス諸語に共通の機能というものを設定することは難しかった。「条件法現在・条件法過去」の語形成については、「未来・前未来」の語形成を過去にシフトしたものと見なせる言語とそのように見なせない言語があるのだが、それが当該形式の機能の画定にまで影響を与えているからである。

まず、「条件法現在・条件法過去」の形式が「未来・前未来」の形式を過去にシフトしたものと見なせる言語の当該形式の機能については、「未来・前未来」の機能を過去にシフトしたものと見なせる場合とそうでない場合があった。そのような言語の「条件法現在・条件法過去」の時間的用法は基本的に「未来・前未来」のそれと並行関係にあったが、そのモーダル用法については、必ずしも「未来・前未来」のそれと並行関係にあるとは言えなかったからである。例えば「条件法現在」を見ると、スペイン語、ポルトガル語では、「未来」が「現在の推量」を表示するのと同様に、「条件法現在」が「過去の事態の推量」を表示するが、フランス語では、「未来」は「現在の推量」を表示しても、その「条件法現在」は「過去の事態の推量」を表示することはないのである。一方、イタリア語のように、「条件法現在・条件法過去」の形式が「未来・前未来」の形式を過去にシフトしたものではない場合、その時間的用法は「未来・前未来」のそれと並行したものにはならない。しかし、そのモーダル用法を見ると、「条件法現在」は発話時と同時関係にある事態に言及し、「条件法過去」は過去の事態に言及するといったように、「条件法現在・条件法過去」の形式が「未来・前未来」の形式を過去にシフトしたものである言語と同じ様相を示す。このことを踏まえ、対象とする6つのロマンス諸語すべてに共通の「条件法現在」「条件法過去」の特徴を示すならば、「条件法現在」のモーダル用法は発話時と同時関係にある事態に言及でき、「条件法過去」のモーダル用法は過去の事態に言及することができる、ということになる。以上のことをまとめると、本研究が対象とする6つのロマンス諸語は、「未来・前未来」においてはその時間的機能を共有し、「条件法現在・条件法過去」においてはそのモーダル的機能を共有するということになる。

最後に、「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の機能をその統語的出現環境という観点から見ると、当該形式の時間的用法、モーダル用法のあり方とは別に、常に一定であった。すなわち、条件節、when節で「未来」が出現できれば、「前未来・条件法現在・条件法過去」のいずれも同様に条件節、when節で出現できるのである。また、この統語的環境における「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の振る舞いは、それらの形式とロマンス諸語それぞれにおける接続法の関係を示すことにもなった。というのも、とりわけ、when節で「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」を容認しない言語では、代わりに接続法が使われていることが確認されたからである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 Hiromi YAMAMURA	４．巻 1
２．論文標題 El pluscuamperfecto del espanol en comparacion con el plus-que-parfait del frances en la narracion	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Garcia Perez, Rafael/Morimoto, Yuko (eds.) De la oracion al discurso　Estudios en espanol y estudios contrastivos, Peter Lang	６．最初と最後の頁 107-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Hiromi YAMAMURA	４．巻 46
２．論文標題 Los usos del futuro en espanol y sus funciones －en busca de la funcion unitaria del futuro en espanol－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化論究（九州大学）	６．最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4377714	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡邊淳也	４．巻 1
２．論文標題 フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 益岡隆志監修『[研究プロジェクト] 時間と言語』ひつじ書房	６．最初と最後の頁 261-289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Jun-ya Watanabe	４．巻 220
２．論文標題 Etude contrastive de quelques connecteurs formes sur le verbe dire en francais et en japonais	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Langages	６．最初と最後の頁 21－42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3917/lang.220.0021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 27
2．論文標題 コルシカ語方言学の諸問題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語・情報・テクスト（東京大学）	6．最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080119	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 1
2．論文標題 認知モード、アフォーダンスとフランス語	5．発行年 2020年
3．雑誌名 渡邊淳也・和田尚明編『TAMEに関する多言語研究と認知モード』TAME研究会	6．最初と最後の頁 167－184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 和田尚明	4．巻 1
2．論文標題 日本語と英語の時制・アスペクト・モダリティならびにその関連現象－包括的時制解釈モデルによる分析－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 渡邊淳也・和田尚明編『TAMEに関する多言語研究と認知モード』TAME研究会	6．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 和田尚明	4．巻 1
2．論文標題 日英語の三人称小説における時制形式選択とその関連現象－言語使用の三層モデルとC-牽引に基づく分析－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 益岡隆志監修『[研究プロジェクト] 時間と言語』ひつじ書房	6．最初と最後の頁 231-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 和田尚明	4．巻 2
2．論文標題 英語の「した」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 庵功雄・田川拓海 編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第２巻：「した」「している」の世界』	6．最初と最後の頁 137-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山村ひろみ	4．巻 44
2．論文標題 スペイン語の「未来」と「過去未来」－その機能的類似点と相違点について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語文化論究	6．最初と最後の頁 11-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 26
2．論文標題 フランス語の単純未来形と条件法―叙法的対立とその源泉―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語・情報・テクスト	6．最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 34
2．論文標題 フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6．最初と最後の頁 57-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木信吾	4．巻 43
2．論文標題 ルーマニア語における「時制の一致」のあり（有標）・なし（無標）について：アガサ・クリスティの原文とルーマニア語訳文中で間接話法がもつ対応関係をもとに	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京音楽大学研究紀要	6．最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ギボ・ルシーラ	4．巻 第7号
2．論文標題 日本の大学におけるポルトガル語教育－言語変種をどう扱うか－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 複言語・多言語教育研究	6．最初と最後の頁 44-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岸彩子	4．巻 第40号
2．論文標題 大過去と『場』の共有	5．発行年 2019年
3．雑誌名 埼玉女子短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 67-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岸彩子	4．巻 第41号
2．論文標題 大過去と背景知識	5．発行年 2020年
3．雑誌名 埼玉女子短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山村ひろみ	4．巻 41
2．論文標題 スペイン語の丁寧表現－「丁寧の線過去」と「丁寧の過去未来」をめぐって－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語文化論究	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山村ひろみ	4．巻 54
2．論文標題 日本語母語話者にとっての「過去の出来事」・「過去の状況」とスペイン語の「点過去」・「線過去」の使い分け	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語科学	6．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 51
2．論文標題 フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ロマンス語研究	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邊淳也	4．巻 33
2．論文標題 フランス語大過去形の特徴的用法について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6．最初と最後の頁 81-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 和田尚明	4．巻 18（2）
2．論文標題 新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのかーモダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明するー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 28-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Naoaki Wada	4．巻 0
2．論文標題 C-gravitation and the grammaticalization degree of "present progressives" in English, French, and Dutch	5．発行年 2018年
3．雑誌名 New Trends in Grammaticalization and Language Change	6．最初と最後の頁 207-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 岸彩子	4．巻 51
2．論文標題 フランス語の半過去と日本語のテイル―telicな意味の半過去を巡って	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ロマンス語研究	6．最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Lucila Gibo	4．巻 51
2．論文標題 A alternancia entre os preteritos perfeito, mais-que-perfeito simples e mais-que-perfeito composto no portugues escrito: analise dos fatores morfossintaticos condicionantes	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ロマンス語研究	6．最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計33件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 L. GOSSELIN (2018) "Le conditionnel temporel subjectif et la possibilite prospective" の論評
３．学会等名 第７回TAME研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 フランス語の接続法とポリフォニー
３．学会等名 第９回TAME研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 willの解釈と対応するフランス語：事行の時空定位と主体のポジション
３．学会等名 第９回TAME研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 和田尚明
２．発表標題 英独語の単純現在形の「未来時指示」について
３．学会等名 第8回TAME研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大森洋子
２．発表標題 La expresion de la futuridad en espanol
３．学会等名 東京スペイン語学研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 ギボ　ルシーラ
２．発表標題 ポルトガル語のfuturo epistemicoについて
３．学会等名 第７回TAME研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 ギボ　ルシーラ
２．発表標題 Analise dos valores modais das formas do futuro: diferencas entre PE e PB
３．学会等名 日本ポルトガル・ブラジル学会旧関西部会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山村ひろみ
２．発表標題 スペイン語の未来と過去未来－その機能的異同について
３．学会等名 日本フランス語学会2019年度シンポジウム「ポルトガル語，スペイン語,フランス語の時制と叙法の対照・比較」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山村ひろみ
２．発表標題 再考：スペイン語の「未来」の諸用法と「未来」の機能－スペイン語「未来」の統一的機能を求めて－
３．学会等名 日本スペイン語学セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 フランス語大過去形の特徴的用法について
３．学会等名 日本フランス語学会第326回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 フランス語の単純未来形と条件法：叙法的対立とその源泉
３．学会等名 日本フランス語学会2019年度シンポジウム「ポルトガル語，スペイン語,フランス語の時制と叙法の対照・比較」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 フランス語の語彙の抽象性・操作性と日本語の語彙の具象性・指示性
３．学会等名 言語系学会連合・日本英語学会共催2019年度公開シンポジウム 「ことばは現実をどう捉えるか ―ことばの対照研究のおもしろさ―」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoaki Wada
２．発表標題 On the so-called volitional use of will : Semantic or pragmatic or both ?
３．学会等名 The 15th International Cognitive Linguistic Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Haruka Shimura, Naoaki Wada, and Hiroko Wakamatsu
２．発表標題 The indefinite use of the Present Perfect Progressive and its emotional effects
３．学会等名 The 15th International Cognitive Linguistic Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木信五
２．発表標題 イタリア語条件法がもつ他者性に推量がオーバーラップするとき
３．学会等名 第４回TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 ギボ・ルシーラ
２．発表標題 ポルトガル語の未来と過去未来：推量及び伝聞マーカー
３．学会等名 日本フランス語学会2019年度シンポジウム「ポルトガル語，スペイン語,フランス語の時制と叙法の対照・比較」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 AgnesCelle (2007)(2008)の紹介と考察：発話者の non-committementという概念に基づく条件法の統一的分析－二つのパラタックス構文を中心に－
３．学会等名 第４回TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 P. Dendale, 2001（推測未来と「~に違いない」のdevoirはどのように違うのか）紹介と考察
３．学会等名 第６回TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 イマ（今）とは何か：同一性と他性（差異性）
３．学会等名 西南言語対照研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 モニカ・ハムチュク
２．発表標題 A brief overview of Romanian tenses and moods that can express evidentiality, with corpus-based examples
３．学会等名 第６回TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 モニカ・ハムチュク
２．発表標題 The Romanian conditional and how it expresses evidentiality- with corpus-based examples
３．学会等名 第７回TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸彩子
２．発表標題 大過去と結果状態
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会関西支部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸彩子
２．発表標題 フランス語の大過去―ディスクールの大過去を中心に―
３．学会等名 科研費（基盤研究(C)課題番号17K02804）講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山村ひろみ
２．発表標題 スペイン語とフランス語の cond，condpc，fut，futpcの記述的対照
３．学会等名 TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山村ひろみ
２．発表標題 日本語母語話者にとっての「過去の出来事」「過去の状況」と点過去と線過去の使い分け
３．学会等名 日本スペイン語学セミナー(SELE2018)
４．発表年 2018年

１．発表者名 Jun-ya WATANABE
２．発表標題 Gerondif no-coreferntiel et les modes de cognition
３．学会等名 Chronos 13（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡邊淳也
２．発表標題 フランス語の半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト再論
３．学会等名 東京フランス語学研究会第39回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Naoaki Wada
２．発表標題 Temporal phenomena in first-person stories: A contrastive study of English and Japanese from a perspective of the three-tier model of language use
３．学会等名 Chronos13（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Naoaki Wada
２．発表標題 How to express (indirect) speech acts in English and Japanese: A perspective from the three-tier model of language use
３．学会等名 The 5th International Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE5)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 A propos du marqueur UCHI japonais : subjectivite et alterite
３．学会等名 Journee d'etudes sur l'alterite
４．発表年 2018年

１．発表者名 小熊和郎
２．発表標題 フランス語前未来形の過去推測用法と見切り用法、条件法の推測用法の制約について
３．学会等名 TAME研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸彩子
２．発表標題 大過去と『場』の共有
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会関西支部会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Lucila Gibo
２．発表標題 ポルトガル語の条件法と証拠性
３．学会等名 TAME研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 マリ＝ジョゼ・ダルベラ＝ステファナッジ著、渡邊　淳也訳	４．発行年 2020年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 156
３．書名 コルシカ語	

１．著者名 Monica Hamciuc	４．発行年 2021年
２．出版社 Editura Sf. Ioan Nicolae	５．総ページ数 118
３．書名 日羅オノマトペ辞典 Dictionar onomatopee japonez-roman	

１．著者名 山村ひろみ	４．発行年 2019年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 159
３．書名 解説がくわしいスペイン語の作文［改訂版］	

１．著者名 和田尚明	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓者	５．総ページ数 444
３．書名 The Grammar of Future Expressions in English	

１．著者名 渡邊淳也	４．発行年 2018年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 180
３．書名 叙法の謎を解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡邊　淳也 (Watanabe Jun-ya) (20349210)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	ＧＩＢＯ　ＬＵＣＩＬＡ (Gibo Lucila) (30737218)	上智大学・外国語学部・准教授 (32621)	
研究分担者	和田　尚明 (Naoaki Wada) (40282264)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　信五 (Suzuki Shingo) (40338835)	東京音楽大学・音楽学部・客員教授 (32646)	
研究分担者	大森　洋子 (Omori Hiroko) (60233277)	明治学院大学・教養教育センター・教授 (32683)	
研究分担者	小熊　和郎 (Oguma Kazuro) (70169259)	西南学院大学・公・私立大学の部局等・名誉教授 (37105)	
研究分担者	ＨＡＭＣＩＵＣ　ＭＯＮＩＣＡ (Hamciuc Monica) (70721124)	鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・准教授 (17701)	
研究分担者	黒沢　直俊 (Kurosawa Naotoshi) (80195586)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	岸　彩子 (Kishi Ayako) (80749531)	埼玉女子短期大学・その他部局等・准教授 (42418)	
研究分担者	藤田　健 (Takeshi Fujita) (50292074)	北海道大学・文学研究科・教授 (10101)	削除：2019年1月10日

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Videoconferencia: Futuro y evidencialidad	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関